

建築主：渡辺 栄一

設計：暮らし十職 一級建築士事務所

施工：株式会社 大山建工

所在地：松戸市

普請道楽で受け継がれる伝統木造

松戸の家



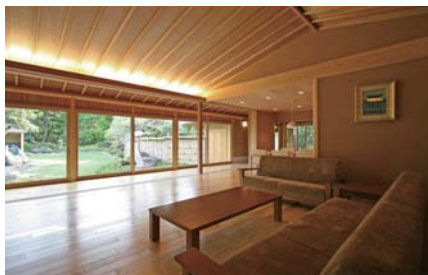
主庭からの全景 庭と馴染むように高さを整え、屋根を雁行させて動きを与えた。

230m²ほどの伝統的な木造平屋の住宅である。銘石および銘木のコレクションがそもそもあって、それらを散りばめた作庭が先行していた。庭園に調和した建物をつくってほしいという依頼だったという。園路を行くと、さまざまな表情の石が語りかけてくる。庭の随所からの建物の見え方や、建物からの庭の眺めが入念に検討されており、完成度の高い空間を作り出している。施工は青森の工務店である。南部地方特産の赤松を活かし、青森で数寄屋大工を育て、東京方面でも複数の仕事をしてきた。このような普請道楽のおかげで、高い技術の求められる建築がつくられることで、森林が維持され、後継の職人たちの働く場ができる。その価値を評価した。

「日本らしい生活の姿を、現代に創出する」ことが、設計者の前田伸治さんの志だという。確かに、続き間のリビングと十畳の和室や池に張り出した濡れ縁に身を置くと、床に座して心地よい住まいのくつろぎが感じられるものの、

奥へと深く引き込まれる日本的な空間感覚に少々欠ける。プランから伺い知る限り、その背面には普通の近代的な高性能住宅部分が隠されている。

交通量の多い県道に面し、農地や戸建て小規模団地、ゴルフ場、ロードサイド型商業施設など、多様な土地利用が脈絡なくパッチワーク状に散りばめられている地域にある。閉ざされた門扉の向こうに何があるのか、行き交う大型車両を背に、門前の鞍馬石の巨大踏石から想像を巡らすしかない。こうして結実した職人の伝統技術の世界を、郊外都市化した松戸という地域の空間の質を高めることにどうにか結びつけられないものだろうか。（岡部 明子）



リビングより主庭を望む
座った目線で庭に焦点を結ぶように開放し、内部空間を整えた。



和室外部
池に張り出して濡れ縁を回し、内外の空間がダイナミックに交わる。